

<書評>

浜本満著

『信念の呪縛：ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』

九州大学出版会, 2014年, 534頁, 8,800円 (+税)

浜田 明範*

本書は、ケニア海岸地方のドゥルマ社会を30年に亘って調査してきた著者による妖術についての民族誌である。著者によるドゥルマ社会についての単著としては、2001年に出版された『秩序の方法：ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』[浜本 2001]があり、本書は二冊目に当たる。『秩序の方法』の出版後、著者はジェームズ・クリフォードの『文化の窮状』[クリフォード 2003]を太田好信らと共訳し、その延長線上に編まれた教科書的な論文集『メイキング文化人類学』[太田・浜本 2005]に収められた論文で独自の民族誌論を展開している。本書には、新たに書き下ろされた多くの章が含まれるが、直接的には、2007年以降に著者が精力的に発表してきた理論的・民族誌的論考の延長線上に位置づけることができる。そのうちのいくつかは加筆修正した上で本書にも採録されており、新たに書き下ろされた章と合わせて一貫性が持たされている。しかし、本書の内容は、2005年以前の著作とも密接に関連しており、それらとの関連を射程に入れた上で理解されるべきである。

I 利益相反

具体的な論評に入る前に、この書評の位置づけについて簡単に触れておきたい。評者は、著者のゼミに二年半にわたって参加した経験があり、その中には修士課程に所属していた二年間が含まれている。つまり、私は、人類学者としての基礎をまさに固めようとしていた時期に著者の強い影響を受けていた。その後も新しい成果が発表されるたびに必ず目を通し、自身の研究を測るための物差しとしてきた。その意味で、この書評は決して公平な立場から書かれたものではない。そのため、本稿はあくまでも速報的なものであり、今後、より公正な立場から書かれた書評が様々な媒体で発表されることを期待している。そのことを十分に理解した上で、読み進めていただきたい。

II 本書の構成と内容

本書は、序論と結論に加えて、5部15章から構成されている。それぞれのタイトルは以

* 国立民族学博物館機関研究員

下のおりである。

序論—妖術信仰と信念の分水嶺—

第1部 妖術の観念

第1章 ムハッソ(muhaso)と妖術—特殊技術としての妖術—

第2章 夜の舞踏者—異常性としての妖術—

第3章 汚れを奪う者たち—万人に開かれた妖術—

第2部 妖術に対する対処

第4章 妖術の治療—クブェンドウラ(kuphendula)—

第5章 妖術に対する防御—防御施術—

第6章 妖術告発

第3部 妖術世界を生きる

第7章 妖術の物語に「捕らえられる」ということ

第8章 ムァディガの復讐

第9章 証明された妖術使い—ローチャの災難—

第10章 呪縛する物語

第4部 反復する抗妖術運動

第11章 抗妖術運動の歴史

第12章 反転する物語—マジュトの抗妖術施術—

第13章 バラバラの抗妖術施術—Bタイプの熱狂と落胆—

第5部 開発と妖術

第14章 抗妖術運動 2006

第15章 行政と妖術信仰

結論

目次をみただけでは内容が推測しづらい章もなくはないが、一見しただけでも、本書が全体を通して、当該地域における妖術に関連する考え方のセット—著者はそれを妖術信仰と呼ぶ—について書かれていることが分かるだろう。副題の通りである。この本は「妖術の民族誌」である。この事実を改めて確認したところで、私は一抹の不安を抱かずにはいられない。おそらく、妖術について興味のある読者はそれほど多くない。それは、人類学内部においてさえ妥当するかもしれない。

著者も序論で触れているように、アフリカの妖術に関する研究は、1990年代後半から2000年代にかけて「妖術の近代性」に注目することで一世を風靡し、日本でも、著者も寄稿している『呪術化するモダニティ』という影響力の強い論集が2007年に出版されている[阿部・小田・近藤 2007]。しかし、この論集の出版以降、日本におけるアフリカの妖術に

関する研究の熱は落ち着いてきているように思える。実際、私（1981年生まれ）と同年代やそれよりも下の世代で、アフリカの妖術を主題にした研究を行っている者はそれほど多くない。ドゥルマやケニア海岸部に興味のある者はそれよりもさらに少ないだろう。

もちろん、私のように妖術を主題として直接的に扱ってこなかった人類学者にとっても、本書の記述は極めて魅力的である。例えば、第1部と第2部を通じて展開される妖術についての考え方やそれへの対処方法の丹念な記述は資料として極めて重要なものと思われるし、第3部以降に展開される具体的な出来事の記述は「文才など欠片もない」[222]という著者の独白に反して小説のように楽しく読めるだろう（中でも私は、第8章の記述が好きだ）。

また、本書の中で繰り返し指摘される妖術における「二重の不在」（不幸を引き起こす妖術師は存在せず、妖術を行う者がいたとしても犠牲者は存在しない、という二重の不在）[122-4]や第3部で展開される筋書きによる経験の組織化＝物語化[294-312]は、妖術信仰を分析するための基礎的な理論的枠組みを提示してくれている。浜本自身も注で言及しているが、彼の議論に親しんでいる人にとっては、これらの理論的な主張が過去にもなされていたことに思い当たるだろう[浜本 1985a, 1989, 2009]。そして、本書の第4部と第5部では、それらを前提としながら更なる議論が展開されることによって、この理論的枠組みの有効性を改めて確認させるものとなっている（特に第12章の分析は鮮やかである）。本書を読むことで、私たちは、著者の作り出した筋書きに捕えられ始めることになるのかもしれない。

Ⅲ 人類学の通常業務

しかし、本書は必ずしも妖術に関心のある人だけが読むべき本というわけではない。

それは、この本が、著者がかつて「人類学の通常業務」と呼んでいたことの模範演技となっているからである。妖術についての民族誌であれば妖術に興味がある人だけが読めばよい。しかし、そこに人類学一般に関連する何か書かれているならば話は別だ。まして、それが「通常業務」と呼びうるようなものであるならば。

確かに、本書の中では、著者は自分のやっていることが「人類学の通常業務」であるという主張は行っていない。どちらかという、抑制のきいたトーンが目立つ。

本書は、第1部、第2部で提示した妖術信仰というドゥルマ社会にインストールされたプログラム（あくまで比喻であるが）が、個々人の経験の水準で、そして歴史の中でどのように実行され、それがどのように自らに最適化した現実を生成し、自らをその力で支え続けているかを、読者にとっては退屈とも思われる詳細な記述と事例の提示によって示そうとしたものである[31]。

この文面からは読者を楽しませることができるかに関する自信の無さが目立つが（そしてそれは杞憂だと思うが）、注目すべきはそれ以前に書かれている部分である。ここで書かれていることの重要性に関して、著者は過去に強い調子で肯定している。

私に見えているこの同じ世界とそこでの出来事が、妖術が存在するという前提のもとではどのように記述されうるのか、そこからどのような観念的および実践的帰結が生じるのか、そこではどのような戦略と行動が理にかなったものとなるのか、社会空間を共有する多くの他者が同じような想定で世界を眺めているときに、そうした戦略と行動はその社会空間においてどのような効果と帰結をもたらすのか……私は妖術信仰そのものを私自身でも生きてみせようなどと言うつもりはないし、そんなことは無理な話である。しかし上のような仕方でそれをシミュレートしてみることは可能である。フィールドでの経験とデータが、そのシミュレーションの正確さに貢献する。何の新味もない話だが、これこそ**人類学の通常業務**であり、それを淡々と遂行すればよいだけのことなのである。[浜本 2009: 74、強調は引用者による]

2つの引用を並べてみれば、本書で展開されていることが、筆者がかつて「人類学の通常業務」と呼んでいたものであることが分かるだろう。そのことについて、これ以上の解説は必要ない。著者による説明がきわめて明晰である。

しかし、ここで述べられている「人類学の通常業務」は、おそらく、すべての人類学者にそれとして共有されているわけではない。近年、人類学の多様化は著しく、各自が「これこそが人類学だ」と思っていることの間には、極度のばらつきと大きな断絶がある。浜本流の人類学を追求する者もあれば、他の道を追求する者もあるだろう。だが、ここで提示されているのが分析と記述の方針とでも呼ぶべきもののひとつであり、きわめて広範な主題と事例に対して適用可能な選択肢を提供している点には注意を払っておいてもよい。

どういうことか。ここで主張されていることは、例えば、妖術信仰における二重の不在や筋書きによる経験の組織化のような妖術という個別的な主題に関する理論的な主張と同じ位相には存在していない。むしろ、(筆者がフィールドで見聞きしたものと同じレベルの確固さで) それらの理論が正しいことを前提にした上で、人々の世界がどのように変転していくのかをシミュレートするというのがここで主張されている方法である。つまり、「人類学の通常業務」は、通常 of 理論的な主張とは位相が異なる場所、抽象度が一段高い場所に位置している。それは、フィールドで見聞きした膨大なデータの断片をひとつの全体にまとめていくようなもの、つまり著者がかつて分析したマリノフスキーにとっての機能主義と同様の位置にあると考えていいだろう [浜本 2005]。そうであるならば、「人類学の通常業務」は、妖術信仰という「プログラム」だけではなく、例えばキリスト教や生物医学

的な知識といったことがらに関する考え方のセットについても適用されうるはずだ。

そして本書の記述全体は、この主張の下に（きわめて周到に）組織されているため、その主張の有効性は理論的な水準だけではなく、本書全体の記述が持つ説得力に大きく依存することになる。この書評で、それと同じレベルでこの分析と記述の方針の有効性について書くことはもちろんできないのだが、民族誌の読者であると同時に筆者でもあらねばならない人類学者に対して、分析と記述の方針の選択肢のひとつを本書が提示していることは間違いない。「人類学の通常業務」という言葉は、文字通りの重みをもって受け取られるべきである。

IV 定点の効用

著者の提示している「人類学の通常業務」が、同じ水準に位置する他の分析と記述の方針との関係でどのような位置にあるのかについて述べる前に、もう一点だけ議論しておきたいことがある。本書のスタイルについてである。先述した、妖術信仰における二重の不在とも密接に関係しているのだが、著者は、「突っ込みどころ満載」[38]の妖術信仰に対して、本書の中で一貫して小気味よい突っ込みを入れ続ける。

一部を紹介しよう。「犠牲者が死ぬ直前に見た夢をどうして知ることができるのかという突っ込みはしないでほしい」[55]、「しつこいようだが—そしてこれは私の一貫したポジションなのだが—模倣の対象である妖術使いなどそもそも存在しない」[149]、「わざわざ確認するまでもないことであるが、教師になってからの彼の不調が実際にムソザ老人によって引き起こされたものである可能性はまったくない。ムソザ老人が彼に対して抱いていたとされる敵意や憎悪も、彼が加えたとされる攻撃も、想像上のものに過ぎない」[233]、「マジュトが来る以前に妖術はかけられており、その効果が後になって現れてきたというのである。これを言い始めたら、もうなんでもありになってしまう」[362-3]。

本書を読めば、著者がどれだけ多くの妖術に関わる語りを録音し、書き起こし、翻訳したのかがよく分かる。しかし、膨大な妖術の語りに埋もれながらも、妖術など存在しないという前提を著者は決して手放さない。確かに、著者は、自身が新興宗教にはまる可能性についても言及している[11-4]。その記述はとても意外で美しい。しかし、妖術の語りに突っ込みを入れ続けることで、論理的矛盾のありかを読者に意識させ続ける姿勢は、ちょっと普通では考えられないほど注意深く、また、頑なである。

「人類学の通常業務」がそうであったように、この著者の姿勢についても人類学の内部に必ずしも合意があるわけではない。私自身、妖術や呪術や霊力があたかも存在するかのように議論を組み立てる人類学の発表を聞いたことがあるし、学部の授業を受けていたときにも「もしかしたら妖術が存在するかもしれないよね？」という仄めかしを受けたことがある。人類学者としてのトレーニングは、「フィールドの人は間違えない」という公準を身につけるところからはじまると考える人も多いただろうし、今まで当たり前だと考えてい

たことがフィールドの経験によって揺らぐことは人類学の醍醐味ともいえる。本書で繰り返し突っ込みを入れ続ける著者の姿勢はこれらのどれとも相容れない。妖術なんてものは存在しない。その姿勢は決して揺らがない。

この姿勢に関する著者による解説は、序論[11-29]や第5部の元になった論考の総序[浜本 2009:74]でもなされているが、記述を貫く姿勢についての説明としてはいまひとつすっきりしない印象がある。おそらく、その理由は、この姿勢についての説明と「人類学の通常業務」についての説明が一緒になされているからであろう。もしかしたら、本書において、著者は妖術が存在しないということについて、また、それを著者の一貫した立場とすることについて、説明する必要をそれほど切実には感じていないのかもしれない。あるいは、それはすでに相対主義に関する論考[浜本 1985b, 1996]の中でけりをつけられているということなのだろう。

この点については、更なる検討が必要とされるが、現時点ではっきりしているのは、妖術など存在しないという著者の一貫した態度が、平均的な日本人のそれと同じ態度ではないということである。うっかりすると見過ごしてしまうような矛盾点に的確につっこみを入れ続ける著者の姿勢からは、妖術の存在を前提としないで考える姿勢を意識的に貫こうとする強い意志を感じる。妖術が存在しないという当たり前に思えることを、あえて丹念に書きつけていく姿勢は、逆説的に他の可能性を想起させる。著者の一貫した姿勢が、再帰的な契機を含んでいることは明らかだろう。

実際、著者は不思議を目撃することへの期待を仄めかしてもいる。「白状しておく、私はこの日のバラバラの妖術使い捕縛で何か驚くような不思議や目覚ましい大活躍のようなものが見られるのではないかと内心期待していたような気がする」[397]。この、ニュアンスに富んだ一文を額面通りに受け取るべきかどうかは迷うところだが、少なくとも、再帰的な契機が含まれていることを読み取るには十分だろう。

同時に、この一貫した姿勢が極めて大きな効用を持っていることにも私たちは留意すべきである。二重の不在にしても筋書きによる経験の組織化にしても、あるいはそれらを前提としたうえで展開されている理論的な主張や物語的な記述にしても、すべては「妖術など存在しない」という前提から出発することによって可能になっている。その意味で、著者の自覚的で頑なに思えるような姿勢は、「人類学の通常業務」と同じように、他の可能性を意識しながら著者によって選択された本書全体の分析と記述の大前提であり、同時に、理論的・民族誌的に豊かな記述をもたらすという大きな効用を持ってもいるのである。

V 信念の生態学は何をどこまで含むのか

「妖術など存在しない」という著者の前提が、本書にとって極めて重要な位置にあることを確認したうえで、著者が「人類学の通常業務」と呼んでいた分析と記述の手法に話を戻そう。著者は、この手法を最終的に信念の生態学に辿り着くものとして提示している。

信念の生態学がいかなるものなのかについて、著者の論理を簡単に跡付けておこう。著者は、信念とは何かというところから丁寧に説き起こしていくが、特に注目すべきなのは、信念についての研究は認識論ではなく実践論に属するという著者の指摘である [19]。「信念は根拠があって信じられるようになるというよりは、信じた結果として生じる現実によって根拠が後付けされることによって、継続して信じるものになる」 [21, また序論注 11 を参照せよ]。

ただし、この過程は、ひとりの人間の手によってのみ引き起こされるわけではない。様々な人々が様々な前提に従って生きている中で引き起こされている。また、人は同時に複数の前提に依拠しながら、つまりひとつの信念だけを完全に信じずに、複数の可能性を考慮に入れながら行為する [24-9]。それらを含めた複雑な過程の分析と記述が著者のいう信念の生態学である。

もっとも、著者は本書では信念の生態学を十全に行うところまではたどり着けなかったと述べている [29, 31, 508]。それは、著者自身と同時に読者である私たちに今後の課題として残されたということなのだろう。しかし、本書について考える上で重要なのは、本書が信念の生態学というプロジェクトのどこまで到達できたかということではないように思える。明らかに、本書では「信念」の生態学以上の事が行われているからである。具体的な事例の分析と記述には、信念以外の要素が入り込んでいる。

それは、とりわけ第 4 部と第 5 部に顕著である。例えば、第 12 章の結論部では、「突然の死」 [367] や「異常な死や災厄」 [368] が、信念の生態学を駆動させるひとつの要素として、しかも、物語や筋書きとは独立して存在するようなものとして記述されている。あるいは、第 15 章では、妖術信仰とは独立して存在しているように思える地域行政の構造について言及されている。これらの「突然の死」や「異常な死や災厄」や地域行政の構造は、果たして信念と言えるだろうか。もちろん、それらの分析は本書の構成上必要不可欠であり、また、本書の筋書きに組み上げられていった地点から遡及的に眺めれば、それらは妖術信仰と密接に関係していることはよくわかる。しかし、それらを通常の意味での「信念」と考えるのには無理がある。

本書で、「信念」の生態学以上の事が行われているというのはこの意味においてである。本書のわくわくするような記述は、信念のみからなる生態学を分析した結果ではなく、「信念」と「信念以外の何か」からなる生態学を分析した結果である。著者の好むプログラムの比喩を援用するならば、プログラムが走っているのはその比喩が通常想起させるようなフラットで無重力な空間ではない。信念というプログラムの他には何も存在しないような言説空間ではない。信念とは異なる何か—それは生物学的な過程や干ばつや、特定の形式の行政組織や集落といった質量をもった要素であるのだが—が、存在感を放ち続けている空間だ。それらの要素の存在する中で、妖術信仰が人々の実践と共に展開しているとするならば、分析すべきことが必ずしも「信念」に留まらないのは必然である。

私は、著者が本書で「信念」と「それ以外の何か」からなる生態学を描いたことを批判するつもりはなく、むしろ好意的に捉えているが、この事実が新たな説明を必要としていることも認めなければならない。つまり、本書で行われたことは、著者が序論において否定的に言及していたコンテクスト化と何が違うのかという疑問に著者は明確に答える必要がある。著者は、「妖術の近代性」についての議論を批判する中で、「**短絡的に**それ[妖術信仰]が見出される歴史的コンテクストとのつながりに**ばかり**目を向けること」[8、強調は引用者による]を批判している。その上で、妖術信仰それ自体の持っている特徴を分析するための方法として信念の生態学を提起する。しかし、先述のように、著者の分析には明らかに信念以外の要素が含まれており、それは「歴史的コンテクスト」の一部と呼ばざるを得ないものである。

「短絡的にコンテクストとのつながりばかりに目を向けること」と「信念の生態学から出発して信念以外の要素を取り込んでいくこと」の違いが、結果として記述にどれほどの違いをもたらすのか。本書はそれを雄弁に物語ってはいる。しかし、理論的なレベルで整理して提示するという作業ははまだ残されたままであるように思える。人類学を実践してきた評者の本音をあけすけに述べるならば、後者の道が前者よりも明らかに困難なことは自明である。だからこそ後者の重要性と優位性を更に明確にしていく必要がある。

それもまた、読者である私たちに残された課題だとも言えるだろう。そしてこの課題には、信念の生態学に、信念以外のどのような要素をどの程度盛り込むべきなのかというやっかいな問いが含まれる。生物学的な過程や行政の構造や、妖術など存在しないという大前提を、生態学の一要素として分析することは妥当なのか。あるいは、そこに何を付け足していくべきなのか。それは、描こうとする対象—妖術信仰なのか、他の何かなのか—によっても変わってくるだろう。これらの問いを念頭に置きながら実践していくことで、浜本流の「人類学の通常業務」はより豊かに、洗練されたものになっていくだろう。

参考文献

阿部 年晴・小田 亮・近藤 英俊（編）

2007 『呪術化するモダニティ：現代アフリカの宗教的实践から』、風響社。

浜本 満

1985a 「呪術：ある「非・科学」の素描」、『理想』9(628) 108–124。

1985b 「文化相対主義の代価」、『理想』8(627) 105–121。

1989 「フィールドにおいてわからないということ」、『季刊人類学』、20(3): 34–51。

1996 「差異のとらえかた：相対主義と普遍主義」、『思想化される周辺世界』清水昭俊（編）、pp. 69–96。

2001 『秩序の方法：ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』、弘文堂。

2005 「村の中のテント：マリノフスキーと機能主義」、『メイキング文化人類学』太田好信・浜本満（編）、pp. 67-90、世界思想社。

2009 「開発とウィッチ・ハント：ケニアコーストにおける地域行政と妖術信仰」『東アフリカにおける暴力の諸相に関する人類学的研究』平成18年度—平成20年度科学研究費補助金（基盤研究B・海外学術）研究成果報告書、熊本大学文学部文化人類学研究室発行、pp.71-149。

クリフォード、ジェイムズ

2003 『文化の窮状：二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信ほか（訳）、人文書院。
太田好信・浜本満（編）

2005 『メイキング文化人類学』、世界思想社。